

16世紀前半北インドの Mugul について

眞 下 裕 之

0

内陸アジアにおける遊牧民の季節移動は、北西邊境の高地から北インド平原へと及ぶ⁽¹⁾。乾濕をドラスティックに繰り返す北インドのモンスーン気候と、乾燥アジアの気候との差異が生むこの定期的波動は、北インドの各時代を通じて確認される王朝交替パターンの物質面を構成する。11世紀のガズナ朝マフムードに始まるムスリムトルコ軍團の侵入・征服も、13・14世紀のモンゴルの侵攻も、この波動に即した現象と見なしうる。

16世紀前半、同じように北西高地から侵入したティムール朝の王子 Babur が北インドに覇権を確立した。以後1858年まで存続するこの政權を研究史は「ムガル朝」ないし「ムガル帝國」と呼んできている⁽²⁾。

この「ムガル」Mugul なる語は、モンゴルを意味する近世ペルシア語の語彙 Mugul~Mugul が近代インド諸語の語彙として取り込まれ、轉訛した形である（以下、本稿では史料の引用を除き、便宜的に Mugul のかたちで統一する）。

しかるにすでに多くの研究者が疑問および假説を提示してきたように⁽³⁾、歴史上この政權が Mugul と通稱されてきたことは、以下のような中央アジア史の文脈に照らして、不可解なことと言わざるを得ない。すなわち、14世紀半ば、中央アジアのチャガタイ・ウルスは東西に各々のハーンを戴いて分裂する。東半はモグール・ウルス、西半はチャガタイ・ウルスとして、各々の人々はモグール、チャガタイとして存続した。後者の版圖に成立するティムール朝はチャガタイとしての立場に立つ。同朝の王子としての Babur およびその子孫たちの立場もおなじである⁽⁴⁾。

(1) この移動についてのヴィヴィッドな敘述はスペイン1980, 167-181を見よ。

(2) 近代的研究史の始點を假に Dow 1803 (1st ed. London, 1768-72) に求めるとして、以降の研究のほとんどはこの政權を Mughal, Mughul, Moghul, Mogul などとしてきた。例外は“House of Timur”との用語法を採った Elphinstone (1st ed. London, 1841) および“The Chughtai Dynasty”とした Keene 1879 である。

(3) Keene 1879, 19-25; Elphinstone 1889, p. 424, n. 4; Elias 1895, 88-90; Subtelny 1989, 108, n. 34; 杉山 1992, 312-3; 関野 1998, xvi-xvii.

(4) 「今日では Babur Padšah の息子たちである諸王を除いてはチャガタイは一人もいない」(TR,

つまり、インド・ティムール朝政權の創業者 Babur のこうした立場に照らして、對立するはずのモグールと同源の Muḡul をもってその政權が通稱される點が不可解なのである。

一方、Babur の母親はモグールのハーン家に屬する。地理的にもモグールの支配地に鄰接した Farḡānah に生まれた Babur の活動の様々な局面にモグールは登場し、それを支援した。この意味では Babur はモグールの立場にも立つ⁽⁵⁾。

たしかに Babur のインド征服軍には、少なからぬ數のこれらモグールを見いだせる。我々は、「ムガル」朝の呼稱の起源をここに求めることができるのであろうか（閒野・注(3)参照）。しかし政權創業者の Babur が、自らの回想録において、モグールに對する敵意・不信感を隠さない事實からすれば（BN, 96, 132 など）、この假説もにわかには成立しがたい。

では、Babur その人ないしその後繼者たちが、我が王朝の誇るべき血脈を、ハーン家あるいはモンゴル族にまで遡らせて強く主張したのだと見るべきであらうか⁽⁶⁾。あるいは、北インドの同時代史料がこの政權に與える Muḡul とは中央アジアの史料において同語が指すところと異なると考えるべきであらうか（Subtelny, 杉山, 閒野・注(3)参照）。

これまで提出された以上の假説のいずれも、いまだ檢證されてはいない。本稿の目的は、この問題について一つの説明を提出することである。

あらかじめ確認されるべきなのは、歴史における集團の呼稱の根據を人類學上の特徴に求めることがまずもって不可能なことである。しかるにこうした呼稱は、それが自稱であれ他稱であれ、それをを用いた者たちの概念の表明である。そうした概念は同時代の記録に定着されるに相違ない。よって、呼稱を追跡するこの種の問題は、用語法すなわちヒストリオグラフィーの立場の問題に還元できることになる。言い換えれば、16世紀前半北インドの Muḡul が13世紀のモンゴルに種族上起源するか否かは、さしあたり問題にはならない。

「ムガル」朝にかかわるヒストリオグラフィーは、立場の相違を基準とすれば、以下の要素から成るであらう。1. プレ・「ムガル」朝時代の Indo-Persian 史料, 2. 「ムガル」朝のオーソリティのもとに作成された Indo-Persian 史料, 3. Afḡān にかかわる Indo-Persian 史料, 4. 地方史にかかわる Indo-Persian 史料, 5. ヨーロッパ諸語史料⁽⁷⁾。

107)。

(5) 以上のような Babur を取り巻く血縁關係については Subtelny 1989 を見よ。

(6) この假説を表明した研究は管見の限り存在しない。

(7) 近代インド諸語を史料として用いる方法論はいまだ確立していない。よってここでは取り扱わなかった。

本稿では Muḡul の通稱が自稱か他稱かの確認を行い（史料群 上記 2.）, 「ムガル」朝に先立つ時代における Muḡul の用法を確認し（同 1.）, 「ムガル」朝時代当初の時期焦点に点を絞り Muḡul の通稱の適用の實際を明らかにする（同 4, 5.）。

Afgān 史料（同 3.）は、以下の理由から本稿では取り扱わない。Lūdi 朝, Sūr 朝といった Afgān 族政權の歴史を記すこれらの史料はいずれも、「ムガル」朝時代に作成されたものである。一部のものは、「ムガル」朝のオーソリティのもとに著作されてさえいる。すなわち「ムガル」朝の成立を外側の目で見えた同時代史料としての性質を、これらの史料は備えていないのである。

1

Bābur 政權およびその後継者たちが主張した自らの位置は、自らが主張した系譜に明示されるはずである。

この政權の歴代の君主の名において発行された farmān（敕書）おもて面に捺される玉璽には多くの場合、當代の君主の名を中央に配し、それを取り巻く同心圓の中に父祖を遡る系譜が記される⁽⁸⁾。

AH 933. DhQ. / 1527 年発行の Bābur の farmān に捺された圓形印⁽⁹⁾では、中心圓に Bābur の名を配し、時計回りにはぼ 1 時の位置から系譜をたどり、Amīr Timūr を 12 時の位置に配して終わる。

（中心圓）Zahīr al-Dīn Muḡammad Bābur 28 //（外周圓）Ibn ‘Umar Ṣayḥ / Ibn Sulṭān Abū Sa‘īd / Ibn Sulṭān Muḡammad / Ibn Mirā... [Mirān] Ṣāh / Ibn Amīr Timūr⁽¹⁰⁾

また、即位 35 年（AH 1103）. Muh. 20 / 1691.10.13 の Awrangzīb の farmān に捺された玉璽は正方形の印である。正方形に内接する二重同心圓の内圓に當代君主の名を記

(8) 「ムガル」朝の系譜を伴う玉璽の形態・機能・使用についての総合的な議論が Gallop 1999. 本稿作成の最終段階で入手したこの論文によって、本節の論據に補強された部分があつたことは幸運であつた。

(9) British Library, India Office Library and Records, 4720, Batala collection no.1. この印の寫眞は Gallop 1999, 107; Mohiuddin 1971, illustration no.1 (faced p.76).

(10) この玉璽の中心圓に見える 28 の數字を Gallop 1999, 107 は AH 928 と解釋する。文書の折り目に捺された印の一部が破断しているため、數字の 9 を補う餘地は確かにある。しかし、Bābur が AH 899 年に Padšāh になつた時點（BN, 3）からの數え年 28 年、すなわち AH 926 年とも解釋できよう。Bābur の玉璽の他の例の出現が待たれる。

し、その外周の時計回りに1時の位置から、代々の父祖の名を記す複数の小圓が取り巻く。その系譜も、Timūr まで遡る點で上に同じである⁽¹¹⁾。

玉璽に見られるこの系譜は、必ず Timūr までの父系の系譜を遡って終わる。中央アジアのモグール・ハーン家やチンギズ・ハーン家との繋がりを主張する系譜、あるいはモンゴル族始祖傳説に遡る系譜は決して現れない。この點から、この王朝が自ら主張すべき系譜は Timūr 家のそれに他ならなかったことが明らかになる。

ところで「ムガル」朝の歴史記述において Šāhib-i Qirān とは王朝の誇るべき名祖 Timūr を指す。しかるに同朝第5代 Šāh Gahān が Šāhib-i Qirān-i Tānī を號したことはティムール朝の跡を繼ぐと主張するこの王朝の立場を示すものに他ならない。かの有名な偽書の Timūr 自傳 *Malfūzāt-i Timūrī* が作成されたのが他ならぬこの Šāh Gahān 治世であったことも故ないことではないであろう⁽¹²⁾。

もちろん、モンゴル族あるいはチンギズ・ハーン家とつながる系譜を主張する姿勢が、この王朝に缺けていたわけではない。この王朝の史學史には、當代君主までのティムール朝の歴史を記述する、ティムール朝史のジャンルが存在する。AN, TSC などがそれにあたる。そしてこれらの史書には多く、Timūr から Alan Quwā に遡る系譜、そして舊約聖書の世界人類の系統説に接續して人類始祖 Ādam に遡る傳説的な系譜が載せられている⁽¹³⁾。その系譜を AN に従って記せば、以下の通りである (AN, i, 48-9; 52-86)。

Bābur - 'Umar Šayḥ - Abū Sa'īd - Muḥammad - Mirān Šāh - Timūr - Amīr Ṭarāgāy - Amīr Burkul - Ilankir Bahādur⁽¹⁴⁾ - Īcīl Nūyān - Qarāčār Nūyān - Sūgūgīčan - Īrdimči Barlās - Qačūli Bahādur - Tūmanah Ḥān - Bāysunḡur Ḥān - Qaydū Ḥān - DWMNYN Ḥān⁽¹⁵⁾ - Būqā Qāān - Būzunḡar Qāān - Ālanquwā - ĠWYNH Bahādur⁽¹⁶⁾ - Yuldūz - Mankli Ḥwāgah - Timūrtāš - (およそ2000年の空白) QYAN - Īl Ḥān - TNGYZ

(11) British Library, Or.11698. この印の寫眞は Gallop 1999, 124. これとおなじ印を持つ Awrangzib の farmān は, Gallop 1999, 124 に列擧されたものの他, 以下もある。Khuda Bakhsh Oriental Public Library, Farmān-i Diwān wa Aḥkām-i Īst Īndiyā Kampanī, 3337/17, 卽位 14 (AH 1082). Ram. 24/1672. 01. 24 の日付け。

(12) ティムール朝の後裔としての「ムガル」朝の立場は圖像資料にも現れている。Timūr 以下累代の同朝君主が(時には王子たちも)列席する架空の祝宴を描いた繪畫が複数傳存している。これについては Canby 1994; Okada 1992, 27-35.

(13) この意味では Storey 1927-39, 381 が中央アジア史書に分類する *Silsilat al-Salāṭin* も上記ティムール朝史と見なされる要素を備えている。「ムガル」朝 Muḥammad Šāh に獻呈された本書については、まず Foltz 1996, 52, n.14 を見よ。

(14) ZN, 83a: Ilangīz Nūyān; HS, iii, 392: Īlangīz Nūyān.

(15) ZN, 23a: Dūtūmanīn Ḥān; RS, 1011: Dūtūmanin Ḥān; HS, iii, 13: Dūtūmanin Ḥān.

(16) ZN, 22a variant: ĠWBYNH; HS, iii, 12: ĠWNYH~ĠWYNH.

Ḥān⁽¹⁷⁾-Mankli Ḥān-Yuldūz Ḥān-Āy Ḥān-Kun Ḥān-AGWR⁽¹⁸⁾ Ḥān-Qarā
 Ḥān-Muḡul Ḥān-GYWK Ḥān-DYB BAQWY⁽¹⁹⁾-ALNĠH Ḥān⁽²⁰⁾-Turk-
 Yāfiṭ-Nūḥ-Lamak-MTWŚLḤ-Aḥnūḥ-Yard-Mahlā'il-Qaynān-Anūš-Šīṭ-Ādam

しかるに、この系譜は ZN に見られるもの (ZN, 12a-25a, 26a-27a, 78a, 82b-83a) を初めとして、RS (RS, 817-822, 1011), HS (HS, iii, 5-16, iii, 392-3) に見られるものなど、中央アジアでティムール朝が主張してきたものと同じである。言い換えれば、自らのモンゴル系譜に対する「ムガル」朝の立場は、父祖代々のものと変わってはいない。

とすれば、この事実が明らかにするのは、Bābur 以降の王朝が、自らのモンゴル系譜を誇ったということではなく、むしろ彼らがティムール朝の立場をそのまま踏襲したにすぎないということである。

さらに、この系譜は AN の後、百年以上経て著作された TSC (AH 1132/1719-20 成立) においても変わるところはない (TSC, 4r-8r, 13v)。また、さきに見た玉璽の系譜のパターンもまた、この王朝の最末期に至るまで変化を遂げない⁽²¹⁾。すなわち、この王朝自身の立場は当初よりその最後まで変わらず、ティムール朝の栄光を誇るものであり続けたことになるのである。

とすれば、Muḡul の呼称は「ムガル」朝の自稱ではなく、同朝を見なした他者の視點の反映であることになる。

2

Bābur 政權の成立を、政權外の立場から見た同時代史料は少ない。Bābur が倒した Lādī 族のデリー政權に関する史書は、いずれもその後半世紀を経た Akbar 朝以後に作成されていることに留意すべきである。

その意味で貴重な史料が LQ である。

(17) ZN, 20b-21a: TNKR Ḥān; HS, iii, 10: TNKR Ḥān.

(18) ここは Uḡūz とあるべき箇所である。ZN, 18a-20a: Uḡūz~Uḡūz; HS, iii, 7-9: Uḡūz.

(19) ZN, 17a: DYBAWQWY; RS, 817: DYB YAQWY; HS, iii, 6: DYB BAQWY

(20) ZN, 17a: ALMĠNH Ḥān; RS, 817: ABWLĠH Ḥān~ABLĠH Ḥān; HS, iii, 005: ALMĠNH

(21) たとえば National Museum, New Delhi 所蔵の Akbar 二世 (1806-37) 即位第21年發行の farmān (Acc. no. 56.141) に同様の玉璽と系譜とが確認される。この文書・玉璽は Gallop 1999 に把握されていない。

この著作は、Čištiyyah のシャイフ ‘Abd al-Quddūs Gangūhī (d. 1537. 11) について、息子の Rukn al-Dīn (d. 1575-6) が作成した言行録である⁽²⁾。Humāyūn の北インド再征服 (1556) の前に成立した本書は、Lūdi 朝→Bābur, Humāyūn 政權→Sūr 朝という、北インドの政治的混亂を反映する同時代の著作である。そしてそこには、Bābur 軍團による略奪や Humāyūn の無様な敗戦の様子など、Akbar 時代に編纂された史書ならば決して行けない叙述が見える。このことから、この著作が「ムガル」朝を外側から見た視点によって成立していることが明白である。

さて、LQ は Bābur 麾下の軍團について以下のように語っている。

【Šayḥ ‘Abd al-Quddūs が】 Šāhābād に来た後、1年して、本書の著者たる卑しき僕 Rukn al-Dīn が 897. JumI. 5 [1492. 3. 5] に生まれた。その後、私の弟たちも Šāhābād で生まれた。40年近くの間、すなわちそれより2—3年足らずの間、Šāhābād に暮らした。その後、Afgān たちの王權 (bādšāhi) は去り、Muḡul の Muḥammad Bābur 陛下 (Ḥaḍrat-i Muḥammad Bābur-i Muḡul) が王 (bādšāh) になった。Šāhābād は略奪を受けて荒廢した。Ḥaḍrat-i Quṭbī 【Šayḥ ‘Abd al-Quddūs】 は妻子 (a’yāl wa atfāl) とともに GNGWW⁽³⁾ に暮らすようになった。(LQ, 31)

また

【Šayḥ ‘Abd al-Quddūs は】直感 (kašf) の持ち主であった。彼が夢に見たことは、寸分違わず、現実のものとなるのであった。ある夜、Šāhābād で深夜の禮拜の後、禮拜敷物 (muṣallā) の上に座っていると、神秘的な直感 (kašf-i ḥiṣāb) が生じた。そして、彼が覺めたままに見たのは、Ḥurāsān の方から火が燃えながらやってくる、一切を焼き盡くす (ḥušk wa tar mī-sūz-ad) というものであった。翌朝、彼は子供たち全員にこの件を話して、「逃げる準備をしなさい。何らかの災厄が降りかかってくるでしょうから」と命じた。そうこうするうちに、Muḡul たちの到来と彼らによる略奪が始まった。Muḥammad Bābur Bādšāh の到来が起こるたびに、全地域【の

(2) 著者自身が著作の中に記すところによれば、本書は1537.10に著作を開始し、父親の死後1538.01に完成したという。この著作に、Dattū Sarwānī なる人物が著者のもとに持ち込んだ記録が付属していることを明らかにしたのは、Digby 1965 の功績である。‘Abd al-Quddūs が登場する夢見譚で構成されるこの付属部分には、Humāyūn が Šir Šāh に敗北を喫する1540.5の Qanawḡ の戦いの記事が見える。だから、著作としての本書の成立はそれ以降ほどない時期のことであろう。

(3) おそらく GNGWH=Gangūh の誤りであろう。本書のように、インドで出版された石版印行本にはこの種の誤りは珍しいことではない。

住民] が逃亡し、略奪が行われた。私たちににとっては、安靜の地と逃亡の場²⁴はまさにこの Gangūh のまち (qaṣabah) であった。(LQ, 63)

上の記事からは、Bābur の軍團が Muğul と呼ばれていることが確認できる。この事實は、Bābur 政權成立前後の北インドにおける史料記述の用語として、問題の通稱がすでに確立していたことを示すものである。

この事實は一方、同時代のインドに自ら滞在したヨーロッパ人の用語法にも反映している。

1534年にインドに到来した Garcia da Orta は 1535—6 年には Guḡarāt に滞在していた。1563年に Goa で出版された自著で彼は言っている。

Dely の王國は内地の北の方にはるかに廣がっている。そして Coraçone の土地と接している。その地【Dely の内地】はたいへん寒く、我が國と同じように雪が降り、氷が張る。我々が Tartar 人 (Tartaros) と呼ぶ Mogor 人 (Mogores) が30年以上前にそこを取った。(Orta, i, 120)

1563年から30年以上前にデリーを取った集團は、1526年の Bābur 麾下の軍團以外にあり得ない。ポルトガル人が Tartar と呼ぶその集團が Mogor (<Muğul) であるという Orta の證言は、先に確認した北インドにおける用語法の存在を裏付ける。

一方、1528年から1538年までインドに滞在した Castanheda は、在印ポルトガル人將官の證言と文書記録から情報を収集し、歸國後は歸國者の證言と文書記録とを加えて、1551年から1561年にかけて順次、史書を印行した。そこに言う。

これより前、俗に Mogor と呼ばれている人々 (povos) の王が India に入ってきた。

【中略】この王が India に来た理由は、彼の戦場にいた数名のポルトガル人たちから私が知ったところでは、Xeque jsmael に敗れたことである。彼は6000騎とともに彼から逃れたのであった。彼は自分が敗れたのがわかり、恥ずかしさから自分の王國に戻ることを望まなかったため、この失敗を繕うための何らかの處置を講じることもせず、自分の【王國】に隣り合っていた Deli の王國を征服することを決心して、Deli の王の兄弟の助力を得て戦争を開始したのであった。(Castanheda, VIII, lxxxiii, 337-8)

²⁴ maḡall-i qarār wa guriz gāh. テキストにある qarār は farār:「逃亡」とあるべきかも知れない。

一部不正確な情報を含む後半のくだりが指すのは Babur 麾下の軍團に他ならない。Mogor~Muğul の用語法についてこの記事が指し示すところも Orta と同じである。

さらに1580年に「ムガル」朝 Akbar 宮廷を訪れた Monserrate は、1590年に著作した記録を *Mongolicae Legationis Commentarius* 『モンゴルへの使節の覺書』と題し、別の報告書では Akbar を「Mogor 人 (Mogores) の王」と呼んでいる (Relação, 191)。

以上の事實は、「ムガル」朝成立前後の時期においてすでに、北インドの歴史記述で「ムガル」朝集團を Muğul と呼ぶ他稱の用語法が確立していたことを証明する。このことはつまり、この用語法が後代になって発生したものではないことを示すものである。そして、外來者の觀察にも反映するほど、その用語法が北インドにおいて広く普及していたこと、すなわちそれが反「ムガル」朝の立場に偏った用語法ではないこと、もまた明らかとなる。

3

「ムガル」朝成立前後の北インドにおける Muğul の用語法の存在が確認できたので、その通時性を検証することが必要であろう。

北インドの歴史記述において、Muğul の語が初めて登場するのは、むろん13世紀前半以降のモンゴル軍團の侵攻にかかわる記事である。その後、14世紀半ばまで断続的に侵入を繰り返す Nikūdārī 軍團、あるいはチャガタイ・ウルスの軍團を指して、同時代のインド・イスラム史料は Muğul と呼んでいる²⁵⁾。

しかるに1398—9年に Timūr の軍團が北インドに侵入し、首府デリーを襲う²⁶⁾。王朝の立場からすれば Čagatāy に他ならず、本来 Muğul とされようのない Timūr の軍團を北インドの史料はいかに呼んでいるであろうか。

ここでは、Timūr の侵攻の後四半世紀を経て書かれ、デリー政權 Sayyid 朝の Mubārak Šāh (位1421—33) に獻呈されたデリー・イスラム王朝史 TMS が参照するに値する。

1398年末、東進してきた Timūr の軍團はまずヤムナー河を渡り、兩河間地方 (Miyān-i Dū Āb。ヤムナー河とガンガー河との間) に略奪を行った後、反轉してヤムナー河を再び渡り、首府 Dihli に總攻撃をかけた。殺戮と略奪の末に Timūr の軍團が歸投した後の情勢を TMS は語る。引用文中の Mirat は Dihli の北西、ヤムナー河の彼岸すなわち兩

²⁵⁾ 一連のモンゴルの侵攻については Jahn 1956; Aziz Ahmad 1961; 惠谷 1965; 1965; Hamadani 1986; Jackson 1999. Nikūdārī 軍團については Aubin 1969; 志茂 1971; 北川 1979; 北川 1981; 北川 1983 a; 北川 1983 b; 北川 1984.

²⁶⁾ Timūr のインド遠征については加藤 1974.

河間地方に位置する。

801. Raj. [1399.3—4月], Sulṭān Naṣir al-Dīn Nuṣrat Šāh は, Iqbāl Ḥān の策動に注意を向けて, 兩河岸地方に向かい, わずかの一團とともに Mirat の地域 (ḥiṭṭah) に来た。'Ādil Ḥān が4隻の象と自分の軍團を連れて, Sulṭān に合流した。Sulṭān は彼を策動によって捕らえ, 象を獲得した。Muḡul の手から解放された兩河岸地方の人々は Sulṭān のもとに集い始めた。そして, およそ2000騎とともに Sulṭān は Firūzābād に向かった。(TMS, 167)

ここでは, Timūr の軍團が Muḡul と呼ばれていることが注目されるべきである。

また, Guḡarāt の地方政權に仕えていた Fayḍ Allāh によって1501—2年に著作された TSJ のデリー・スルターンの記事は TMS にほとんどパラレルである。しかるに, 問題の Timūr の侵攻後に「Muḡul の手から解放された Miyān-i Dū Āb の人々は Sulṭān のもとに集い始めた」との上記の TMS のくだりを TSJ は「Amīr Timūr の手から方々に隠れていた人々が彼のもとに集まり……」(TSJ, 83)としている。

このことは, Muḡul すなわち Amīr Timūr と読み替えるコードが北インドの同時代史料に存在していたことを示すものと解釋できる。

以上からは, 13—14世紀のモンゴル侵攻について用いられた Muḡul の語が, 15世紀から16世紀にかけてなお有効であったことが示される。そのうえで, 本来, Muḡul とされようはずのない Timūr の軍團が, 北インドのヒストリオグラフィーにおいて Muḡul と呼ばれていた事実が確認できる。そしてそこからは, Muḡul という名稱が, 北インドの歴史記述において, モンゴルに対してのみ, あるいは「ムガル」朝に対してのみ與えられたのではなく, むしろ, 北西山地からの侵入者全般に対して, 一律に與えられたものではないかとの假説が導かれる。

4

この假説が證明されるためには, 「ムガル」朝が成立して以降の時期に, それとは別の政體・集團を同時代史料が Muḡul と呼んでいる事例が存在しなければならない。

成立間もない「ムガル」朝を他の政權の立場から眺め, かつ外來者としての客觀的な立場に立つ, この目的に照らして好適な史料が Chronica である^㉞。

㉞) この著作の寫本は三點が把握されている。

1535年末から1536年前半の間に著作された本書⁸⁸⁾は、著者 Diogo de Mesquita⁸⁹⁾ が1528年の海戦で捕虜となって以来、Guḡarāt 政權の宮廷に滞在した際の見聞に基づくものである。すなわち Chronica は Guḡarāt 政權の中樞に滞在した、外來者としての Diogo de Mesquita の觀察を反映する。外來者であるがゆえに、彼がかえって偏見なく寫し取ったであろう同時代の用語法は、北インドのそれであると考えてよいはずである。

さて、1530年代前半の Guḡarāt をとりまく外交環境はきわめて複雑であった。Dīw に要塞建設をもくろむポルトガルが海上を脅かす一方、Dihli, Āgrah に依據する Humāyūn 政權が Guḡarāt 征服を狙っていた。西鄰の Sind には、Bābur の征服によって Qandahār を追われた (1522年⁹⁰⁾) Šāh Big Arḡūn の子 Šāh Ḥasan 麾下の軍團が侵入し、同地の Ğām 政權が倒れた (1529年)。そして亡命してきた Ğām Firūz を保護し、姻戚關係を取り結ぶ Guḡarāt 政權と Arḡūn 部との間には緊張が高まりつつあった。

1534年3—5月頃、Guḡarāt 政權 Sulṭān Bahādur は Humāyūn 政權との和解を模索して、數度にわたって使者を交換していた。首都 Čanpānīr に到來した Humāyūn 側

1. Biblioteca Nacional de Lisboa, no.299, ff.1-41v, not dated, 16C. 前半。
 2. Prof. Pandronga Pissurlencar 所藏本, not dated (17C.).
 3. 'Capitolo das cousas que se pasarão no Reino do Guzarate depois da morte do Solltam Modafar', Arquivo Nacional da Torre do Tombo (Lisboa), Coleção de S. Vicente, vol. 11, ff. 91-111, not dated.

1にもとづく校本が ChronicaG, 2にもとづく校本が ChronicaB。3の最初の一葉の寫眞と transcription が Mathew 1986, 243-248 に載る。ChronicaB の Introduction (おそらく K. S. Mathew の執筆) および Mathew 1986, 245 は3こそが1, 2の祖本であるとしているが、根據を擧げてはいない。Cortesão 1944, lxiv は1とともに合冊され同じ手の書寫による Tomé Pires の *Suma Oriental* を含む no.299 寫本を16世紀前半のものとする。*Suma Oriental* の他の寫本との關原から、この年代設定を動かす餘地は今のところない。しかるに根據なく1を17世紀の寫本とする ChronicaB, xvii の前提は Cortesão の認定をまったく無視している。このように3が1より古い原本であるとする根據がない以上、1ではなく3に基づかねばならぬ必要はない。一方、2は1からの寫しであるというから、校本としては ChronicaG が用いられるべきである。

⁸⁸⁾ Chronica の著作の年代は、Chronica そのものの記事からはほぼ確定できる。本文末尾において、Guḡarāt 政權 Sulṭān Bahādur が Humāyūn 軍團の追撃を逃れて Dīw に逃れたとの記事の後に「現在彼は1535年11月17日のときと同じ状態であり、ポルトガル人たちの支援を待っている」(Chronica, 2-81) とある。Sulṭān Bahādur の Dīw 到着は1535年6月半ば頃であり、ポルトガルに Dīw 要塞建設を容認するかわりに兵員の供與を受ける條約が同年10月25日に結ばれている。その後、Humāyūn 軍團に對して Dīw から反攻に出るのが、1536年4—5月頃である(眞下 1995, 129-30)。Chronica が Sulṭān Bahādur の反轉について知らないのは上の記事から明らかだから、Chronica の成立はそれ以前でなければならぬ。すなわち、Chronica は1535年11月17日以降1536年4月以前に書かれたことになる。

⁸⁹⁾ Sulṭān Bahādur がポルトガル側に謀殺されることになる1537年2月の交渉の場の騒亂で、戦死した「フランク人の法官(qāḡī-i farang)」(AN, i, 145) が Diogo de Mesquita であるという ChronicaB (Introduction), xx の説は以下の點から誤りである。Couto, IV, iv, 9, 312 は Diogo de Mesquita については、他の箇所で見られるとおり、ジョアン國王【位1521-57】がこの者のためだけにソファラ・モサンビークの要塞を與えたということをお我々は知っている」としており、確かに、1553年當時、モサンビークのカピタンとして活動する Diogo de Mesquita が確認できる(Couto, VI, ix, 22, 402-3)。よって彼が1537年に死亡することはあり得ない。

⁹⁰⁾ この年代の考證については BNtr, 436 を見よ。

の使者と Sulṭān Bahādur は會見に及ぶ。

王 [Sulṭān Bahādur] は Cabaia のまちに着くと、すぐに Champanell への道を進んだ。そこで Mogor 人 (Mogores) の使者に會った。そして彼らの信書について幾度も相談して、すぐに Mogor 人に對して戦いを起こすべく Sacardar Cao を Morby に派遣することを決心した。(Chronica, 23/70)

Sacardar Cao が派遣された Morby は、ペルシア語史料では MWRBY (MS, 266)、ポルトガル語史料では Morby, Morbij, Morbim と現れ、Guḡarāt と Sind との境域に位置する。

Morby に派遣された Sacardar Cao が備えるべき相手は、Humāyūn 政權との衝突について、西方の Sind からの侵入が危惧される Argūn 部集團であることは疑いない。このことは、次の記事から確定できる。

この後試みられた Humāyūn との和平交渉も不調に終わり、1534年10月、Sulṭān Bahādur 麾下の軍團は Humāyūn 政權傘下の Čitūr を攻圍するに及ぶ。そのときに、

月が姿を見せると、王 [Sulṭān Bahādur] はまず、Champanell のカピタンであった Estearcao という名の貴族を Morbim に派遣することを決心した。これは、Sind の Mogor 人 (Mogores do Simde) の侵入に對してそこで防衛するためであった。(Chronica, 23/72)

ここで注目されるのは、Sind の Argūn 部の軍團が Mogor 人 (Mogores) と呼ばれていることである。これが例外的な用語法でないことは他の諸例が存在することから確認できる。Humāyūn 軍團に撃破された Sulṭān Bahādur の行動として、

王はこの知らせを得ると、Sind (Simde) と境を接する Morbim の諸地方へと陸路で急行した。そして、Mogor 人 (Mogores) が向かおうとしていると知るとすぐにそこから逃亡した。(Chronica, 23/81)

とある。實際、Humāyūn の Guḡarāt 追撃に便乗して、Mīrzā Šāh Ḥasan 麾下の Argūn 軍團が Guḡarāt に亂入している (TS, 162-3)。

また、1534年3月に Sulṭān Bahādur のもとにもたらされた報告によれば、

Morbim の方面でも、Mogor 人 (Mogores) の tanadar⁽³¹⁾ たちと王 [Sultān Bahādur] の tanadar たちとが騒亂を起こしていた。(Chronica, 23/69)

という。

以上の例から、Guḡarāt において Muḡul~Mogor の語が、Sind の Argūn 部集團に對しても用いられていたことが確認できたことになる。すなわち「ムガル」朝とはことなる集團が同時代史料によって Muḡul~Mogor と呼ばれている例をこのように検出できたわけである。

これを踏まえれば、やや時代の下るペルシア語の地方史史料における同様の記述も、この假説を支持する證據として價值を帯びることになる。

AH 1009 / 1600—1 年頃⁽³²⁾、Bakhar 地方で著作された Sind の地方史は、Guḡatāt に進撃した Humāyūn 軍團に便乗して Mirzā Šāh Ḥasan 麾下の Argūn 部軍團が Guḡarāt に侵入し、Patan を包圍したことを傳えている。降伏の打診に、守備隊の長は

Sind の Muḡul たち (Muḡul-ān-i Sind) に砦を明け渡すなどという、どんな必要が私に生じたというのか?。(TS, 163)

と言って、突っぱねている。

また1611年(あるいは1613年)に成立した Guḡarāt の地方史は、1529年、Argūn 部軍團の攻勢の前に Guḡarāt に亡命を餘儀なくされた Sind の Ğām Firūz について、傳えている。

[AH 935年] Shaw. [1529.6—7月], Sind 地方の王 (badšāh) Ğām F, irūz Muḡul の軍團に敗れて、Sultān のもとに避難してきた。【Sultān は】彼を厚遇しが「私があなたの國 (mulk) を敵の手から取って、あなたに與えましょう」と慰めた。(MS, 217)

ここに見る Sind の Muḡul も、Ğām Firūz を追った Muḡul も Humāyūn 麾下の「ムガル」朝軍團ではあり得ず、Argūn 部麾下の軍團であることは明白である。そして既述

(31) <fhānah-dār. fhānah は地方の治安維持業務の據點。その長官が fhānah-dār.

(32) この年代は本文中に「AH 1009年の今日」と著者が記していることに基づく(TS, 124)。Storey 1927-39, 651-2; Marshall, 366 は著作の年代を特定していない。

の通り Argūn 部もまた北西高地 Qandahār から到来した集團であった。

以上のことから、「ムガル」朝初期の同時代史料から、北西高地から到来した、「ムガル」朝以外の集團が Muḡul と呼称されていた事実が確定できた。そして、それらの史料が、地方史史料ないしヨーロッパ語史料であって、「ムガル」朝ヒストリオグラフィーには含まれないゆえに、その用語法は、北インドにおいて広く流通していたものに他ならないと断定できることになる。

さらに以上の用語法は、種族上の起源にかかわらず用いられたものであったものと思われる。すでに見たとおり、Bābur 麾下の軍團を Muḡul と呼称していた LQ は言う。

このしもべは、‘Abd al-Quddūs と分かれた後、Badāyūn の地域に來た。そしてある夜、夢を見た。そこでは、西の方から埃を上げて激しい風が吹いてきて、闇に包まれ、地面にはその跡 (dāḡ) が残った。木々も家々もみな根こそぎ倒れ、吹き飛ばされて、東の方へと飛んでいった。私は、この夢を見て、「おお神よ、この暴虐の風から私が平安でありますように」と大いにおそれた。ちょうどそのとき、私は ‘Abd al-Quddūs から以下のように聞いて驚いた。「これは暴虐の風です。Afgān 人たちの不幸なる性質によって吹き下りて來たのです。Afgān たちの戦列は崩れ、Turk たちの戦列は廣がるでしょう。そして安寧 (ḥayriyat?) が訪れるでしょう」。一年後、Bābur 王陛下が出現し、Sulṭān Ibrāhīm との戦いが生じて、Afgān たちが敗北した。Afgān たちの戦列は崩れ、Turk たちの戦列は廣がった。(LQ, 71-2)

LQ における Muḡul と Turk との混用は、Muḡul の語のそうした、種族にかかわらぬ用法を確認させるものである。この確認は、同時代の外來者 Castanheda の觀察から補強することが出来よう。

これより前、俗に Mogor 人 (Mogores) と呼ばれている人々 (povos) の王が India に入ってきた。【中略】この人々とともに、他の様々な國の人々が入ってきた。Tartar 人 (Tartaros), Turquimā 人 (Turquimães), Coraçon 人 (Coraçones) その他である。彼らは皆、Mogor 人 (Mogores) と呼ばれているが、本来の Mogor 人 (Mogores) とは私が言うところの者たちなのである。(Castanheda, VIII, lxxxiii, 337-8)

最後に、用語法の追跡という本稿の方法を離れ、北インドにおける Muğul の種族形成に言及し、問題の用語法が生じた背景を考察する。

15世紀後半から16世紀初頭にかけて Argūn 家の支配下にあった Hazārah, Nikūdarī 集團が Garmsīr, Zamīndāwar に存在した(北川1984, 221-225)。16世紀初頭にもいまだ Muğul 語を話していたというこれら Hazārah, Nikūdarī たちが(BN, 203), ジュチ家所屬の駐屯モンゴル軍である当初の Nikūdarī 集團に起源することは疑いない。13世紀後半から14世紀にかけて北インドに跳梁した彼らを同時代の北インド史料が Muğul と呼んでいたことは前述の通りである。

このことを根據に、Muğul 語を話し、Nikūdarī に起源することをこの時期・地域におけるモンゴル種族性の基準とすることがまずは妥當であろう。

しかるに Qandahār を追われて Sind に入った Argūn 集團の大部分を彼らが占めていたと假定できるなら、Sind の Argūn 部衆は名實ともに Muğul であったことになる。

だがこの點を立證する材料は乏しい。Qandahār を追われて以後のこの集團の動向はほとんど TS によってしか知り得ない。史家 Ḥwāndamīr は、Harāt から Āgrah の Bābur のもとに向かう途中1527年7月以降、1528年3月まで Qandahār に滞在しているが、詳しい状況を書き残してはいない(HS, i, 586)。

Qandahār に依據していた Argūn 集團は、Timūr 家の内訌に關與していくどかの攻撃を受けた。後には Šaybānī Ḥān 麾下のウズベク軍團、その後には Šāh Ismā'īl 麾下のサファヴィー朝軍團、さらに Bābur 麾下の軍團の攻撃と續く政情の變轉の中で、この集團は四散を繰り返している。すなわち Hazārah, Nikūdarī 集團と Argūn 家との關係が分解しうる政治狀況が存在した。

それに対応するかのように、当初は Argūn 家支配下の集團として TS に頻繁に言及される Hazārah, Nikūdarī の名⁸³も、Qandahār 陥落以後は、わずか一例において言及されるにすぎない(TS, 146)。そのかわりに現れるのが Muğul という呼稱である。

とすれば TS において Argūn 集團に對して Muğul の呼稱が用いられたとしても、上記の用語法を踏まえるならば、それをモンゴル族との種族上の繋がりを見出す證據として

83) 後者は TS においてすべて Hazārah とともに TKDRY の形で現れる。この形が NKDRY であるべきことは、同時代史料の HS などから明白である。よって TS の TKDRY はすべて NKDRY と読み替えた。この點は、いずれ寫本資料から裏付けたい。

採用することは必ずしも妥当ではないことになる。

したがって16世紀初頭、Argūn 家とともに Sind に、種族上モンゴルと認めうる Hazārah, Nikdūarī 集団が多数侵入した可能性は否定できないけれども、現在の史料状況では検証されざる假説といわざるを得ない。同時期に Kabul を経て侵入する Bābur の軍團に、この集団がいかほど付随したかという点も、同じく今後に残された課題である。

とはいえ、16世紀初頭、上に示した意味でのモンゴル種族に属する Hazārah, Nikūdari 集団がたしかに北西高地に存在したことは、13—14世紀のモンゴル侵攻の歴史の遺産である。そして16世紀の Muğul の用語はそのモンゴル侵攻に起源する。ゆえに、16世紀、上記モンゴル諸族の北西高地における存在そのものが、この用語法の背景となり得たことは確実である。北西高地からの侵入者について、Turk でも Halağ でもなく、Muğul の呼称が流通した理由はそれであると考えられる。ただし、Muğul の語が集団の起源にかかわらず用いられた用語であり、ひとり北西高地のモンゴル諸族のみを指したものであり得ないことは、すでに確認したとおりである。

6

本稿で確認したのは以下の諸点である。

「ムガル」朝集団は成立の当初より、北インド住民によって Muğul と呼ばれていた。ただし16世紀前半、「ムガル」朝の成立前後の歴史記述において、Muğul なる用語は、ただ「ムガル」朝集団のみを指したものではない。それは13世紀以来、北西高地からの侵入者全般について、種族にかかわらず、北インドの住民が用いた他称である。

すなわちこの用語法は同時代の中央アジア史料の用語法と断絶している。したがって、後者の用語法に立つ BN において「モグール」と呼ばれる人々が Bābur に付随してきたことが「ムガル」朝の呼称の起源であるとする假説は成立しない。

この用語法の背景は、13世紀以来のモンゴル諸集団の侵入の歴史、および16世紀前半当時の北西高地におけるモンゴル系部族のプレゼンスであった。ただし「ムガル」朝も含め、16世紀の侵入者集団にこれらモンゴル系部族がどれほど含まれていたかは今後の課題として残された。

一方、「ムガル」朝自身は末代まで、Muğul を自稱することはなかった。この王朝自身としては、モンゴル系譜を誇る必要はなく、ティムール朝の後裔としての立場を表明するだけで十分であった。なぜなら、北インドに成立したこの王朝政権は、モンゴル、チンギズ・ハーン家との系脈の繋がりが尊重される中央アジアのような社会環境に、もはやい

なかったからである。でありながら、この王朝がティムール朝以来惰性的に持ち合わせてきたモンゴル系譜は偶然にも、北インド住民の上記の用語法に一種客観的な根拠を與えることになったものと考えられる。

ヨーロッパ人の記録文獻は言うまでもなく、北インドに普及していたこの用語法を反映した。しかるに「ムガル」朝にかかわるヨーロッパ人の歴史記述は、こうした記録文獻と、現地語史料の翻譯というまったく立場の異なるヒストリオグラフィーのアマルガムとして出發する⁶⁴。ゆえに、近代以降の諸研究に當初から上記の用語法が反映されるのは當然であった。

以上のごとく、Mugul とは、北西高地からの侵入者の波動が歴史を形成してきた北インドの時代状況を内蔵する用語である。ゆえに研究上の用語としての「ムガル朝」に、不審な點は存在しない。一方「インド・ティムール朝」は、そうした環境に成立した王朝自身の立場を表現する用語として、同じく妥當である。よって、いずれを用いるかは研究者個々の立脚點に歸されるべきであろう。

本稿を閉じるに当たり、積み残した課題一題への視角を提示し、展望にかえる。

Afgān に対する Mugul という二元的な對立圖式はとくに Afgān 史料に看取できる。ムガル朝の倒した北インド政權が Afgān に屬する Lūdi 朝であり、創業間もないムガル朝の覇權を瓦解に追い込んだのが Afgān に屬する Sūr 朝であるゆえに、それも自然なことであるかに見える。しかしこれら Afgān 政權にかかわる歴史記述は、Akbar 時代以降によりやく登場するに過ぎない。よって、史料論の上では、Afgān が Mugul に先行すると考えるのはアナクロニズムである。さらに、たとえ、10世紀末の地理書に Afgān の名がすでに見え、すでにプレ・ムガル時代のイスラム・インドにおいて活動する Afgān が史料に確認できるとしても、創世から當代の Afgān 諸部族までの系譜を整理した文獻は

64) この具體例は、たとえば上引の Dow 1803 に確認できる。Firištah, *Gulšan-i Ibrāhīmī* の翻譯から成る本書には、Firištah のテキストにはない Dow 1803 自身の字句の挿入が見られる。たとえば Bābur の記事の冒頭、ティムール朝 Abū Sa'īd について述べる部分で、[Abū Sa'īd] who held the titles of the mogul empire in the western Tartary, and in Chorassan, (Dow 1803, ii, 168) との一節は Firištah の對應部分には存在しない。Abū Sa'īd の王朝を the mogul empire とするのは明らかに Dow 1803 の解釋である。

同様に無根據の解釋の混入は d'Herbelot 1777-9 の Mogol の項にも確認できる。その説によれば、Ginghizkhan の建てた Mogol の「第二王朝」の最後の Sultan たる Soiourgatmisch を Tamerlan が廢して別の帝國を建設し、その後、Uzbeigh に追われた同帝國の王子 Babor が Indes に逃げて「第三王朝」を建てた、ということになる (d'Herbelot 1777-9, ii, 646-7)。

18世紀初頭にすでに始まる、ヨーロッパ人の「ムガル」朝史記述の情報源・形態・系統にかかわる諸問題は、インド東洋學史の關心から徹底的に調査されるべき重要な課題である。

65) 前者からの引用は22/頁番號、後者からの引用は23/頁番號と示す。

66) 本寫本については、京都大學イラン・アフガニスタン・パキスタン學術調査隊將來の寫眞版を参照した。寫眞のフォリオ番號は見えない。寫本のマージンまでを焼き付けていない故であると思われる。引用におけるフォリオ番號は筆者が付したものである。

ムガル朝治下の17世紀におよんで初めて登場するに過ぎない。以上の事實は、Afgān 民族史がムガル朝支配への反作用として發生したとの推論を生む。とするならば、Muḡul, Afgān の dualism は Muḡul の用語法の追跡という視角でなく、インド・アフガーン・ヒストリオグラフィーという視角において究明するのがもっとも妥當な方法だと考えられる。18世紀以降、ムガル朝支配を解體へと導く Afgān 諸族のパワーとその時代に簇生する Afgān 系譜書 (nasab nāmah) の存在は、單に尙武の部族主義からのみ説明されるべきではない。

凡 例

- ・ヒジュラ暦は AH で示した。同暦各月の略號は以下の通り。Muh; Saf; RabI; RabII; JumI; JumII; Ram; Shaw; DhQ; DhH.

参考文献

- AN Abū al-Faḍl, *Akbar Nāmah*, (Āḡā Aḥmad ‘Abd al-Raḥīm (eds.), *Akbar Nāmah*, 3 vols., Calcutta, 1877-87).
- BN Zāhīr al-Dīn Muḥammad Bābur, *Bābur Nāmah*. (間野英二『バーブル・ナーマの研究I校訂本』, 松香堂, 1995); BNtr: A. S. Beveridge, *The Bāburnāma in English (Memoirs of Bābur)*, London[New Delhi], 1922[1970].
- Castanheda Fernão Lopes de Castanheda, *História do descobrimento e conquista da Índia pelos Portugêses*. (Pedro de Azevedo (ed.), Coimbra, 1924-33).
- ChronicaG Diogo de Mesquita, *Chronica geral dos sucessos do reynos de Gusarate a q. m chamão Cambaya*. (Ethel Pope (ed.), ‘Chronica geral dos sucessos do reyno de Gusarate a q. m chamão Cambaya’, *Boletim do Instituto Vasco da Gama*, 22, 1934, pp. 61-88; 23, 1934, pp. 67-81⁶⁹); ChronicaB: F. A. Mendonca (tr.) & S. C. Misra, K. S. Mathew (eds.), *Chronica do reyno de Gusarate*, Baroda, 1981.).
- Correa Gaspar Correa, *Lendas da Índia*. (R. J. de Lima Felner[M. L. de Almeida] (ed.), Lisbõa[Porto], 1858-66 [1975]).
- Couto Diogo do Couto, *Décadas da Ásia*. (Lisbõa, 1778-1788).
- HS Ḥwāndamīr, *Ḥabīb al-Siyar*. (Tihirān, 1333[n. d.]).
- LQ Šayḥ Rukn al-Dīn Gangūhī, *Laṭā’if-i Quddūsī*. (Dihli, AH 1311.).
- MS Sikandar b. Muḥammad Manghū, *Mir’āt-i Sikandarī*. (S. C. Misra & M. Lutf al-Rahman (eds.), *The Mirat-i-Sikandari*, Baroda, 1961).
- Orta Garcia de Orta, *Colloquios dos simples e drogas e cousas medicinais da Índia*. (Conde de Ficalho (ed.), Lisboa, 1891-2).
- Relação A. Monserrate, *Relaçam do Equebar*. (H. Hosten (ed.), ‘Father A. Monserrate’s account of Akbar (26th Nov. 1582)’, *Journal of the Asiatic Society of Bengal, New Series*, 8, 1912, pp. 185-221).
- RS Mīr Ḥūnd, *Rawḍat al-Šafā*. (‘Abbās Zaryāb (ed.), *Rawḍat al-Šafā*,

- Tihrān, n.d.).
- TMS Yaḥyā Sirhindī, *Tārīḥ-i Mubārak Šāhī*. (M.H.Hosain (ed.), *Tārīḥ-i Mubārak Shāhī*, Calcutta, 1931).
- TR Mīrzā Ḥaydar Duġlāt, *Tārīḥ-i Rašidī*. (W.M.Thackston (ed.), *Mīrzā Ḥaydar Dughlat's Tarikh-i-Rashidi: A history of the Khans of Moghulistan*, Cambridge Mass., 1996).
- TS Ma'šūm Nāmi Bhakarī, *Tārīḥ-i Sind*. (U.M.Daudpota(ed.), *Ta'riḥ-i-Sind, best known as Ta'riḥ-i-Ma'šūmī*, Poona, 1938).
- TSC Hādī Kāmwār Ḥān, *Tadkirat al-Salāṭin-i Čaġatā*. (MS., Kitāb-ḥānah-i Maġlis-i Šūrā-yi Milli, Tihrān, No.2131, dated AH 1234. Saf.21/1818.12. 2⁹⁹).
- TSJ Fayḍ Allāh Binbānī, *Tārīḥ-i Šadr-i Ġahān*. (I.H.Siddiqui (ed.), *Tarikh-i-Sadr-i-Jahan (Account of the Sultans of Delhi)*, Aligarh, 1988).
- ZN Šaraf al-Dīn 'Alī Yazdī, *Zafar Nāmāh*. (A.Urunbayev (ed.), *Zafar-Nama*, Tashkent, 1972).
- Aubin 1969 Jean AUBIN, 'L'ethnogénèse des Qaraunas', *Turcica*, 1, 1969, pp.65-94.
- Aziz Ahmad 1961 AZIZ AHMAD, 'Mongol pressure in alien land', *Central Asiatic Journal*, 6, 1961, pp.182-193.
- Canby 1994 Sheia CANBY, *Humayun's garden party: Princes of the House of Timur and early Mughal painting*, Bombay, 1994.
- Cortesão 1944 Armando CORTESÃO, 'Introduction', in Armando Cortesão (ed.), *The Suma Oriental of Tomé Pires and the Book of Francisco Rodrigues*, London, 1944, pp.xiii-xcvi.
- Digby 1965 Simon DIGBY, 'Dreams and reminiscences of Dattu Sarvani, A sixteenth century Indo-Afghan soldier', *Indian Economic and Social History Review*, 2, 1965, pp.52-80, 178-194.
- Dow 1803 Alexander DOW, *The history of Hindostan (New Edition)*, 3 vols., London, 1803.
- Elphinstone 1889 Mountstuart ELPHINSTONE, *The history of India: The Hindu and Mahometan periods (7th edition)*, London, 1889.
- Elias 1895 N.ELIAS, 'Introduction' in N.Elias (ed.) & E.Denison Ross (tr.), *The Tarikh-i-Rashidi of Mirza Muhammad Haidar, Dughlāt: A history of the Moghuls of Central Asia*, London[Delhi], 1895[1991].
- Foltz 1996 Richard FOLTZ, 'The Mughal occupation of Balkh, 1646-1647', *Journal of Islamic Studies*, 7-1, 1996, pp.49-61.
- Gallop 1999 Annabel Teh GALLOP, 'The geneological seal of the Mughal Emperors of India', *Journal of the Royal Asiatic Society, 3rd series*, 9-1, 1999, pp.77-140.
- Hamadani 1986 Agha Hussain HAMADANI, *The frontier policy of the Delhi Sultans*, Islamabad, 1986.
- d'Herbelot 1777-9 Barthelemi D'HERBELOT, *Bibliothèque orientale*, 4 vols., Haye, 1777-9.
- Jackson 1999 Peter JACKSON, *The Delhi Sultanate: A political and military history*, Cambridge, 1999.

- Jahn 1956 Karl JAHN, 'A note on Kashmir and the Mongols', *Central Asiatic Journal*, 2-3, 1956, pp.176-180.
- Keene 1879 H. G. KEENE, *The Turks in India: Critical chapters on the administration of that country by the Chaghatai, Babar, and his descendents*, [Delhi], 1879[1972].
- Marshall 1967 Dara Nusserwanji MARSHALL, *Mughals in India: A bibliographical survey of manuscripts*, London & New York, 1967[1985].
- Mathew 1986 K. S. MATHEW, *Portuguese and the Sultanate of Gujarat*, Delhi, 1986.
- Mohiuddin 1971 Momin MOHIUDDIN, *The chancellery and Persian epistolography under the Mughals: From Babur to Shah Jahan (1526-1658): A study on Inshā and Munshis, based on original documents*, Calcutta, 1971.
- Okada 1992 Amina OKADA, *Indian miniatures of the Mughal court*, New York, 1992.
- Storey 1927-39 D. A. STOREY, *Persian literature: A bio-bibliographical survey*, 1-1, London, 1927-39[1970].
- Subtelny 1989 Maria Eva SUBTELNY, 'Babur's rival relations: A study of kinship and conflict in 15th-16th Century Central Asia', *Der Islam*, 66, 1989, pp.102-118.
- 恵谷 1965 恵谷俊之「十三・四世紀におけるモンゴル軍のインド侵入」『史林』48-5, 1965, pp.689-710.
- 加藤 1974 加藤和秀「ティームールのインド遠征」『歴史における文明の諸相』東海大學出版會, 1974, pp.171-240.
- 北川 1979 北川誠一「ニクーダリーヤーンの成立」『オリエント』22-2, 1979, pp.39-55.
- 北川 1981 北川誠一「イル＝ハンとニクーダリーヤーン」『イスラム世界』18, 1981, pp.1-18.
- 北川 1983 a 北川誠一「十四世紀初期のニクーダリーヤーン」『北大史學』23, 1983, pp.1-10.
- 北川 1983 b 北川誠一「クルト朝とニクーダリーヤーン」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社會と文化』山川出版社, 1983, pp.647-665.
- 北川 1984 北川誠一「チムール朝とニクーダリーヤーン」日本オリエント學會編『日本オリエント學界創立三十周年記念オリエント學論集』刀水書房, 1984, pp.211-227.
- 志茂 1971 志茂碩敏「Il Khan 國史料に見られる Qaraunas について」『東洋學報』54-1, 1971, pp.1-71.
- スペイン 1980 J. W. スペイン (勝藤猛・中川弘共譯)『シルクロードの謎の民—パターン民族誌』刀水書房, 1980.
- 杉山 1992 杉山正明『大モンゴルの世界—陸と海の巨大帝國—』角川書店, 1992.
- 眞下 1995 眞下裕之「16世紀前半のグジャラートとポルトガル—港市ディーウをめぐる諸關係—」『東洋史研究』53-4, 1995, pp.102-140.
- 間野 1998 間野英二『パープル・ナーマの研究Ⅲ譯注』松香堂, 1998.

【付記】 本稿は、京都大學人文科學研究所共同研究班「十六・十七世紀アジアにおける言語接觸」での報告内容を含むものである。